OISO MUNICIPAL MUSEUM

Report リポート

大磯町郷土資料館だより
2023・3・28
43

目次

2 旧吉田茂邸開館５周年
4 林董関係資料
6 常設展示室から ～赤煉瓦資料の回顧～
8 吉田邸、謎の大釜

平成 29 年４月１日より大磯町郷土資料館の別館として公開された旧吉田茂邸は、令和４年度に開館５周年を迎えました。これを受け、今年度旧吉田茂邸ではさまざまな企画が行われました。

写真は、開館５周年記念「旧吉田茂邸春のダイヤモンド富士見学会」で観測されたダイヤモンド富士の様子です。（令和４年４月10日撮影）

旧吉田茂邸開館５周年

旧吉田茂邸の概要

旧吉田茂邸は明治 17 年（1884）に吉田茂の養父・吉田健三が西小磯に別荘地として土地を購入したことからはじまります。明治 22 年（1889）に吉田健三が亡くなると、妻の士子（ことこ）が本宅として居住しました。

一方で、大正から昭和にかけて外交官として活躍した吉田茂は海外に長く居住し、外務省を退職した後もしばらくは東京に住みました。しかし、東京の自宅が空襲により全焼してしまいます。これを契機として昭和 20 年（1945）に大磯の邸宅を本邸に定め、ここを隠棲の地としました。

明治期の建設以降、吉田邸は幾たびもの増改築が行われました。中でも昭和 30 年代に行われた改築では、大磯の邸宅を海外からの賓客をもてなす迎賓館としての構想のもと、近代数寄屋建築の第一人者である吉田五十八（いそや）が関わりました。

昭和 37 年頃の吉田茂邸

火災と再建までの道のり

神奈川県と大磯町が旧吉田茂邸の活用を検討していた最中の平成 21 年（2009）3 月 22 日、悲劇がおこります。旧吉田茂邸において原因不明の火災が発生したのです。敷地内の庭園や七賢堂、兜門やサンルームは焼失を免れましたが、残念なことに母屋部分は全焼してしまいました。大磯町は火災直後の同年 7 月より「大磯町旧吉田茂邸再建基金」を設置し、募金活動を開始。平成 24 年（2012）には神奈川県と大磯町が旧吉田茂邸再建事業に係る基本協定を締結します。こうした中で平成 27 年（2015）には再建工事が始まり、翌年に工事が完了しました。

大磯町郷土資料館別館として再スタート

大磯の地に再び姿を見せた旧吉田茂邸は、大磯町郷土資料館の別館として平成 29 年（2017）4 月 1 日から公開がはじまりました。以来、吉田茂の生涯や大磯での暮らしなどを、展示等を通じて発信し続けています。

また、吉田茂が思い描いた「大磯の迎賓館」らしく、平成 29 年には WHO（世界保健機関）の視察会場や、ミクロネシア連邦大統領および同外務大臣と河野太郎外務大臣（当時）の懇談会場として、平成 30 年（2018）には日・ブータン外相の懇談会場として利用されました。このほかにも、研修や講演会、イベントなどに使用され、生まれ変わった旧吉田茂邸はさまざまな方面で活用され、多くの方々に御愛顧いただいています。

そして令和 4 年（2022）4 月、旧吉田茂邸はめでたく開館 5 周年を迎えることができました。

4 月　旧吉田茂邸春のダイヤモンド富士見学会

令和 4 年 4 月 10 日、旧吉田茂邸内において春のダイヤモンド富士見学会が行われました。当日、空には薄っすらと雲がかかり観測が危ぶまれましたが、願いが届いたのか、あるいは 5 周年の力か、

春のダイヤモンド富士　金の間からの見学の様子

観測の時間には雲の合間から大変美しいダイヤモンド富士を見ることができました。見学者は金の間・銀の間・ローズルーム（食堂）からダイヤモンド富士を鑑賞しました。

7～8月　旧吉田茂邸で宿泊を伴う体験学習

令和4年7月31日から8月1日、青少年おもしろ講座として、旧吉田茂邸内での宿泊を伴う体験学習が行われました。大磯町在住・在学の中学生を対象とし、「みんなで語ろう、わたしと未来の大磯」のテーマのもと、大磯の歴史講座やテーブルマナー教室、邸内の見学や庭園散策、最終日には大磯の未来を語り合うワークショップが催されました。

旧吉田茂邸内での宿泊体験は今回が初の試み。普段は閉館している夜の旧吉田茂邸を、参加者はドキドキしつつも楽しみながら体験できたようです。

ワークショップでも活発な意見交換が行われ、大磯の未来について考える機会となりました。

宿泊体験会　テーブルマナー教室の様子

9月　旧吉田茂邸限定トートバッグ販売

旧吉田茂邸5周年記念グッズとして、トートバッグの販売がはじまりました。

図柄は全3種類で、うち2種に吉田茂の諷刺漫画で人気を博した清水崑のイラストをデザイン、もう1種には旧吉田茂邸の外観をデザインしました。A4サイズが入る大きさで生地も丈夫なため、大きいもの、重たいものも楽々持ち運べると好評です。旧吉田茂邸ご見学の際には、記念としてご購入ください。

トートバッグ（全3種類）　各1,800円

10月　ガーデンパーティー

令和4年10月1日、大磯町観光協会が主催する「旧吉田茂邸再建5周年記念　吉田茂のガーデンパーティー」が開かれました。このイベントでは県立大磯城山公園の旧吉田茂邸地区全体を広く使用し、邸園マルシェやバイオリン・チェロ演奏のコンサート、七賢堂の特別開扉や吉田茂に関する講座などが開かれたほか、邸園内にいる大磯ゆかりの人物たちを探すゲームなどが行われました。また、旧吉田茂邸内を貸し切り、60名限定で、大磯ガイド協会によるガイドツアーや、かんから三線の演歌師・岡大介氏のライブなどを開催。天気にも恵まれ、当日はたくさんの来園者で賑わいました。

さらに先へ

旧吉田茂邸は再建以来、多くの方々の協力のもとで運営されてきました。そして、今年度無事に5周年を迎えられたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

旧吉田茂邸が大磯町のシンボルとして、また、大磯の近現代史の発信拠点のひとつとして、この先も10年、20年と、多くの皆様に愛される存在で在り続けられますよう、今後もさまざまな活動をしていきますので、皆様のご理解とご協力を引き続きお願い申し上げます。

（当館学芸員／鷹野 真子）

【所蔵資料紹介】林董（ただす）関係資料

大磯町郷土資料館（以下、当館）が所蔵する資料の中から、林董に関係する資料を紹介します。林董（1850 ～ 1913）は明治期の外交官で、駐英大使や外務大臣などを歴任しました。別荘地「大磯」には様々な政財界人が別荘を構えましたが、林もその一人で、明治 22 年（1889）頃に東小磯の現在「翠渓荘」がある場所に別邸を建て、明治 27 年（1894）頃には同じ東小磯の妙大寺西隣付近へ移転した記録があります。大磯に海水浴場を開いた松本順の実弟にあたる林は、松本の縁もあり大磯に別邸を持ったのでしょう。松本の別邸も妙大寺近くにあり、二人の墓所が妙大寺にあることから、二人の親密な関係がうかがえます。

大磯の林董別邸

林董の写真

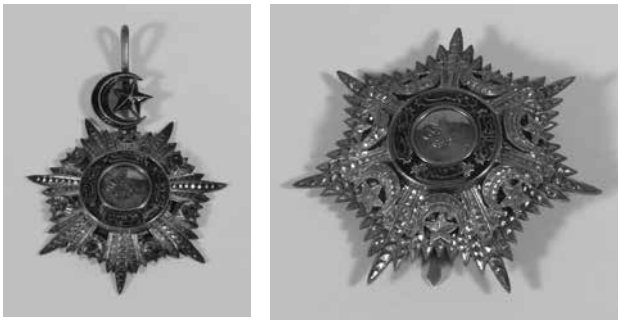
当館では、平成 25 年（2013）に林董のご関係者から写真や勲章をご寄贈いただきました。写真には、明治期の政治家などの肖像写真が収められたアルバム 2 冊と、林や家族の肖像写真、そして林の葬儀の写真があります。

林董肖像

林董の勲章

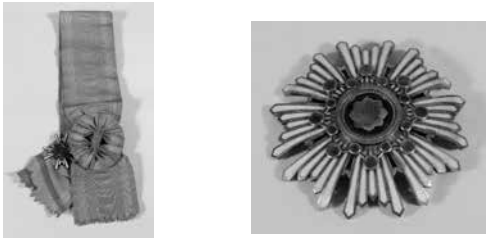
外交官を務めた林は、国内外から多くの勲章を受けました。ご寄贈いただいた勲章は 40 点、その内、受勲年月日が判明しているものが 11 点あります。その中からいくつかをご紹介しましょう。

メジディエ勲章（左：正章、右：副章）


明治 24 年（1891）8 月 1 日受勲

この勲章は、オスマン帝国の勲章です。オスマン帝国は、13 世紀末から 1922 年（大正 11）11 月のトルコ革命によって王制が廃止されるまで存続した帝国で、林が勲章を受けた明治 24 年頃はヨーロッパの法律や制度、教育などを導入し、国内の制度を変革させていました。勲章制度はヨーロッパの文化であり、林に贈られたこの勲章も、ヨーロッパの制度を取り入れた改革の結果の一つと言えるでしょう。受勲の詳細な理由はわかりませんが、林は受勲した 2 か月前、明治 24 年 6 月に外務次官に就任し、外交官としてのキャリアを始めています。

勲一等瑞宝章（左：正章、右：副章）


明治 28 年（1895）10 月 31 日受勲

旭日桐花大綬章（左：正章、右：副章）

明治 39 年（1906）4 月 1 日受勲

瑞宝章は公務に長年従事した者へ贈られ、旭日桐花大綬章は旭日章の最上位勲章で、顕著な功績を挙げた者へ贈られます。林が瑞宝章を受勲した理由は、日清戦争の戦後処理において功績があったためであり、この時同時に男爵に叙せられています。当時、林は特命全権公使として清へ赴任しました。また、旭日桐花大綬章は、日露戦争後に初代駐英大使となり、第二次日英同盟を締結した功績などを理由に贈られました。

レジオンドヌール勲章グランクロワ
（左：徽章、右：プレート）

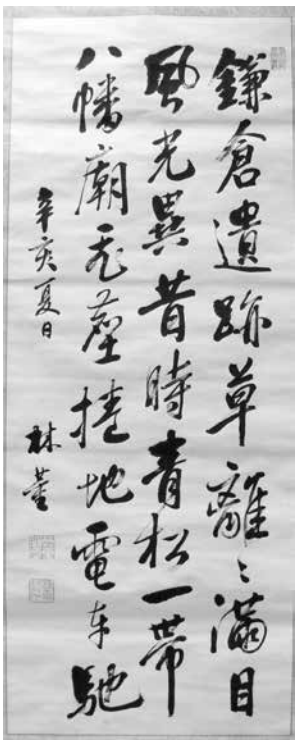
明治 40 年（1907）10 月 23 日受勲

駐英大使の任を終えた林は、帰国後、第一次西園寺公望内閣の下で外務大臣となり、日仏協約を締結しました。レジオンドヌール勲章はフランスの勲章で、協約の締結を理由として贈られたものと考えられます。レジオンドヌール勲章には 5 等級あり、グランクロワは 1 等の最上位にあたります。

書幅「鎌倉懐古詩」

最後にご紹介する資料は、書幅「鎌倉懐古詩」です。この資料は、先に紹介した林董関係資料とは異なり、平成 30 年（2018）に当館が購入しました。

本紙の寸法は縦 138.5cm、横 51.0cm、紙本墨書で、「鎌倉遺跡草離々／満目風光異昔時／青松一帯八幡廟／无蓙捷地電車馳　辛亥夏日　林董」と書かれています。辛亥年とは、林の存命期間を考えると明治 44 年（1911）であることがわかります。詩の意味を要約すると、「鎌倉の遺跡に草が生い茂り、今の景色は往時と異なる。青松が茂る鶴岡八幡宮。そして今この地に電車が走る」でしょうか。鎌倉の



景色から、かつて武士の都として栄えた往時をしのぶ、そのような内容です。

さて、ここで考えたい言葉が「電車」です。林が生きた時代、鉄道は電車ではなく汽車のはずですが、どういうことでしょうか。実はこの「電車」、当時から鎌倉を走っていた江之島電気鉄道（江ノ電）のことを表すと考えられます。江ノ電は明治 35 年（1902）に開業し、令和 4 年（2022）に開業 120 年を迎えました。日本の鉄道は路面鉄道から電化が進み、江ノ電も開業当初から電気を動力としていました。つまり、林が詠んだ「電車」は江ノ電のことで、古都を颯爽と走る江ノ電に感情を寄せたと想像できます。ちなみに、江ノ電が藤沢―鎌倉間の全線を開通させたのは明治 43 年（1910）11 月 4 日で、この書が書かれた時は、まだ全線開通から一年と経っていませんでした。

参考文献

・由井正臣校注『後は昔の記　他―林董回顧録』平凡社、1970 年
・神奈川県編『神奈川県史』通史編 4 近代・現代 1、1980 年
・鈴木昇『大磯の今昔』（四）、1990 年
・江ノ島電鉄株式会社編『江ノ電の 100 年』2002 年
・ユージン・ローガン著、白須英子訳『アラブ 500 年史』上下、白水社、2013 年
・小笠原弘幸『オスマン帝国』中央公論新社、2018 年
・「日本の勲章・褒賞」（内閣府ウェブサイト、https://www8.cao.go.jp/shokun/index.html）、2022 年 12 月 11 日最終閲覧

（当館学芸員／富田三紗子）

常設展示室から
～赤煉瓦資料の回顧～

はじめに

常設展示室には、「近代の象徴・煉瓦」と題した一角があります（図１）。大磯町域において発掘調査等で出土・採集した煉瓦資料は多数存在し、郷土資料館で収蔵しています。「近代の象徴・煉瓦」では収蔵する煉瓦資料の一部を紹介しています。

本稿では展示煉瓦資料のうち、赤煉瓦資料の一部について、受入時の情報などの紹介をしてみたいと思います。

図１「近代の象徴・煉瓦」

赤煉瓦資料について

展示している煉瓦資料は、赤煉瓦と、白煉瓦ともいわれる耐火煉瓦に分けられます。建築材等に用いられる赤煉瓦は、６地点 12 点が展示されています。

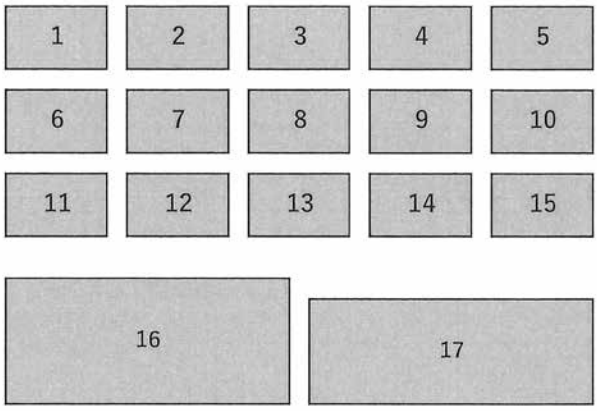


図２　展示煉瓦の配置

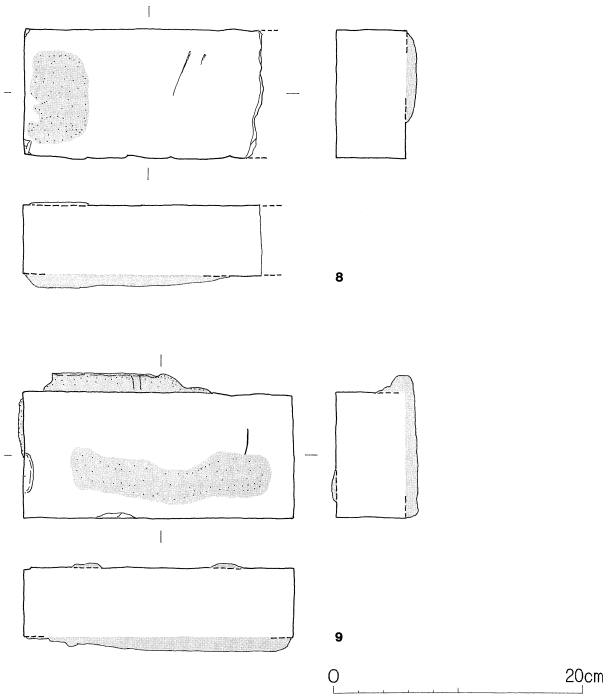


図３　赤煉瓦実測図

赤煉瓦の成形法は、１枚ずつ型に入れる手抜成形から、時代とともに粘土の塊を鋼線で切断する機械成形へと移行しますが、展示資料には両者が見られます。

展示の構成は図２のようになっていますが、展示煉瓦のうち、8・9の資料について以下に詳述します。

当該資料は、平成８（1996）年 10 月に大磯町西小磯地区に所在した、Ｔ氏宅の納屋を解体する計画に伴って実施した資料調査において確認し、納屋に収納されていた農具等の資料とともに郷土資料館に寄贈され、うち２点を展示しています。

図３は赤煉瓦の実測図です。８は片方の小口が失われている個体で、寸法は現存長 19.1cm，幅 10.3cm，厚さ 5.6cm で長手部に波状の湾曲を有しています。平部表面は、機械成形時の切断痕により縮緬状を呈しています。表面の色調は暗赤褐色を呈し、また平部にはモルタル（mortar）が附着しています。

９はほぼ完形の個体で、寸法は長さ 21.7cm，幅 10.0cm，厚さ 5.7cm です。８と同じく機械成形の痕跡があり、条痕も認められます。焼成は良好で色調は暗赤褐色を呈し、平部と長手部にモルタルが附着しています。

８・９は、同時に収集した別の個体の刻印から、

埼玉県深谷市に工場が存在した「日本煉瓦製造会社」の製品であることが考えられます。

資料の経歴

資料調査時、現地においてＴ氏にうかがったところ、本煉瓦資料は赤星彌之助別邸の構築材であったとのことです。大正 12（1923）年の関東大震災で被災した同別邸から古いが品質の良い煉瓦だということでＴ氏の父親が貰い受けてきたとのことです。当時Ｔ氏は 15 歳だったそうです。

図４　赤星彌之助別邸（杉崎俊和氏所蔵）

赤星彌之助は薩摩出身の明治期の実業家です。同郷であり、大阪実業界の雄であった五代友厚や海軍大将となった樺山資紀の知遇を得て、一代で巨万の富を築いた人物です。赤星家が大磯に土地を買い求めたのは明治 31（1898）年のことです。明治 31 年取得の土地は後に譲渡しますが、明治 37（1904）年に大磯町東小磯地区に新たに別邸を構えます。彌之助は明治 37 年に亡くなりますが、亡くなる前に新たな別邸の建築を計画しました。

新たな別邸は、広大な敷地に和館と洋館が建てられていました（図４）。別邸を設計したのは、鹿鳴館やニコライ堂など数多くの近代洋風建築を設計し、日本近代建築の父ともいわれるジョサイア・コンドル（ Josiah Conder ）です。コンドルは明治 10（1877）年に来日して以降日本国内で活躍しますが、大磯町の西小磯地区に別邸を構えます。地元では「コンデルさん」と呼ばれて親しまれていました。

コンドルが設計した赤星彌之助別邸は、関東大震災で被災しましたが、洋館の設計図書が京都大学に遺されており、概要が確認できます。建物の構造は１階が煉瓦造、２階が木造であることが確認できることから、8・9の赤煉瓦は１階部分の構築材であったものと推測されます。

「近代の象徴・煉瓦」の付近には「別荘文化」の展示資料として、先述の洋館設計図書をもとに作製した赤星彌之助別邸の復元模型が展示されていますので、併せてご覧いただければと思います。

おわりに

大磯町郷土資料館での煉瓦資料の収集は、平成３（1991）年２月に、耐火煉瓦資料を採集したことを嚆矢とします。以後多くの資料が蓄積されてきています。

本稿では資料の一例をご紹介しましたが、煉瓦は西洋からの技術導入に伴ってもたらされた、近代を体現する遺物として注視されます。近代に入り、海水浴場開設と鉄道の延線を契機として大いに発展する大磯を表象する資料であると言えます。

図５　赤星彌之助別邸 模型

引用・参考文献

・稲葉和也ほか 1992『大磯のすまい』大磯町文化財調査報告書第 37 集

・鈴木一男・國見　徹 2011「コンデルさんの足跡」『栴檀林の考古学』

・國見 徹 2021「大磯町の横穴墓群のもとにて」『考古遍歴』

（当館館長／國見　徹）

【コラム】吉田邸、謎の大釜

旧吉田茂邸の菜園広場の片隅、ともすれば見落としてしまいそうなその場所に、大きな釜があるのをご存じでしょうか。この大釜は、吉田茂の養父・吉田健三が醤油醸造の会社に携わった際のものです。

旧吉田茂邸 菜園広場にある大釜

吉田健三は、嘉永２年（1849）、福井藩士渡辺謙七の長男として越前国福井（現・福井県）に生まれました。欧米への遊学の経験から英語が堪能で、当時英一番館と呼ばれたジャーディン・マセソン商会の番頭として重用されました。なお、西小磯の旧吉田茂邸の土地は、このジャーディン・マセソン商会の退職金で購入したといわれています。健三は大変商才のある人物でした。ジャーディン・マセソン商会を退職後は、明治初期の横浜を拠点に宅地造成や学校建設、社寺の創建など数々の事業に出資し、実業家として名を揚げました。その事業のうちのひとつが、醤油醸造だったのです。

この醤油店は太田屋といい、健三と同じ福井の出身で義弟の鈴木善兵衛との共同事業として、横浜の太田村で開業しました。醤油製造はなかなか繁盛していたらしく、明治 16 年（1883）頃には横浜の扇町に支店を置いています。ただ、実際には太田屋は鈴木善兵衛に任せていたようです。

実業家として巨万の富を築いた健三でしたが、明治 22 年（1889）、40 歳の若さでこの世を去ってしまいます。これにより、養子の茂はわずか 11 歳で健三の莫大な資産を受け継ぎました。当然、この資産の中には太田屋も含まれます。しばらくは茂の個人経営という形でしたが（とはいえ前述のとおり実際の経営は鈴木善兵衛に任されていたと考えられます）、明治 35 年（1902）に合資組織へ変更、「太田醤油醸造合資会社」と社名も変わります。そして明治 45 年（1912）、茂は実兄の竹内明太郎とも相談し、太田屋の一切を上郎清助、遠藤忠彦に譲渡しています。

養父･健三らによって創業された太田屋の醤油は、海外へ輸出され、内国勧業博覧会などの品評会で表彰されることもありました。吉田茂と醤油醸造、一見結びつかない組み合わせですが、旧吉田茂邸にある大釜は、太田屋の歴史を伝えています。

参考文献

・鈴木昇『大磯の今昔』（四）、1990 年
・森田忠吉 編『横浜成功名誉鑑：開港五十年記念』横浜商況新報社、1910 年
・『日本新聞広告史』1940 年
・『世界之日本』二六新報、1921 年
・高知工業高等学校同窓会 編『工業ハ富国ノ基』高知県立高知工業高等学校同窓会、1997 年

（当館学芸員／鷹野 真子）

Report　－大磯町郷土資料館だより－　No. 43
令和 5(2023) 年３月 28 日発行
編集・発行　大磯町郷土資料館
〒 255-0005　神奈川県中郡大磯町西小磯 446-1
TEL. 0463(61)4700 ／ FAX. 0463(61)4660